第一中

主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成

～対話的な学習場面の工夫を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　佐々木　敏文

１　研究主題について

本校の努力目標の１つである「基礎学力の確実な定着と確かな学力の保証に努める」に迫るため上記の研究主題を設定した。

昨年度までの３年間の研究成果として、生徒同士で課題解決を目指す学習を多く設定することにより、コミュニケーション能力を高めることができた。また、生徒の主体性を高めるにはどのような授業の流れが大切なのか、ということを考えた授業実践ができ、研修主題に迫ることができた。

課題としては、以下の２つが挙げられた。

(1)　個々の思考や小集団での話合い活動では活発に意見交換できるが、集団の場で発表できる力が不足していること。

(2)　生徒が自ら課題を探究し、自分の言葉で表現する力を高めるためのよりよい課題設定の研究が必要なこと。

今年度は、昨年度からの研究テーマは継続し、副題を変更して、研究主題に迫っていく。具体的には、次の内容を充実させていく。

(1)　本質的なねらいを明確にする。

(2)　生徒の目的意識や必要感、話したい、聞きたい、伝え合いたいなどの思いを引き出す学習課題や発問を工夫する。

(3)　ねらいの実現状況を適切に評価し、授業改善に生かす。

このことを共通理解した上で研究を進めることは、生徒の確かな学力の保証への一つの方策であるとも考える。そのことを踏まえて、生徒のよりよい変容を目指した研修を行う。

２　研究のねらい

本質的なねらいに即した対話的な学習場面を工夫しながら、継続していく。そのことによって、生徒と教師、生徒同士の対話に多様な表現が生まれ、生徒自らが思考を広げ深めていくということにつながる。このことを念頭に置き、教師が共通理解のもと実践し、生徒の変容を明らかにする。

３　研究仮説

教育活動全般において、ねらいを明確し、何のための話合いなのか、何について話し合うのかなど、目的や内容を生徒と共有しながら学習場面を組み立てることで、生徒が学ぶことに興味や関心をもつこと、つまり生徒の深い学びの実現につながると考える。

４　研究内容

(1)　対話的な学習場面の工夫と生徒の変容を中心とした話合いの時間を確保する。

(2)　年２回以上の教科の枠を超えた授業参観を行う。

(3)　年２回（７月と１１月）、生徒への意識調査を実施する。

(4)　成果を数値化し、課題を明確にする。

５　研究の経過

（1）研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等
5	31	計画訪問
6	1~30	授業参観月間①　研究仮説に関わる視点をまとめた「授業参観シート」をもとに全教員で授業を参観した。
１１	6~22	授業参観月間②　６月と同じ内容で授業を参観した。
	7	授業研究（国語）　１年３組　授業者　教諭　紀伊綾香 「対話的な学習場面」、生徒の様子を中心として授業研究を行った。
1	11	授業参観月間の様子をもとにした話合いと今後の進め方について話し合った。

（2）一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	5	校内研修①　「研究主題と研修計画について」 研究主題と研究計画についての共通理解を図った。また、教科ごとの研究計画書の様式についても提案した。
8	21	校外研修②　「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり」 講師　八戸市教育委員会教育指導課　主任指導主事　青木拓哉氏
1	24	校内研修③　「今年度の振り返りと来年度の校内研究主題について」

６　研究の成果

（1）　生徒の変容に焦点を当てた授業参観月間を設定することによって、１時間における生徒の学びの様子を細かく観察することができ、各自の授業改善に生かすことができた。

（2）　ねらいを明確にした話合い活動を継続することで、生徒同士の対話に多様な表現が生まれるようになったことが授業参観を通してわかるようになった。

７　研究の課題

（1）　ねらいを明確にすることで、主体的・対話的な学びに近づくことができたが、生徒が学ぶことに興味や関心をもち、深い学びの実現までには至っていない。

（2）　毎時間の授業において、何を学ばせ、それをどのように次につなげていくか、という見通しをもった授業づくりを行い、評価につなげていかなければならない。

（記入者　細山　美栄子）